

漁業調査船 陽光丸の航跡

陽光丸船長 堀田 俊孝

陽光丸は西海区水産研究所が担当する東シナ海や日本海西部の浮魚・底魚類の資源・生態調査や海洋観測などに従事してきました。初代の陽光丸（213 トン）は昭和48年（1973年）に当時の東海区水産研究所から西海区水産研究所に移管され、以後6年間にわたり調査観測業務に従事しました。昭和54年（1979年）に2代目（総トン数499トン）が竣工し、現在の陽光丸は平成22年に竣工した3代目（総トン数692トン）です（写真1.）。



写真1. 上から、初代陽光丸、陽光丸II世、陽光丸III世

現在陽光丸では、東シナ海や日本海西部、有明海などで調査航海を行っています（図1.）。2019年度の計12回の調査航海で航走した距離は、延べ36,725 km（地球約0.9周）におよびました。

東シナ海や日本海西部はあじ・さば類、マイワシやスルメイカといった我が国の重要な水産資源が成育し漁獲される海域で、これらの資源の持続的利用のためには精度の高い調査・観測データの取得が必要です。陽光丸はそういった調査・観測を可能とする高精度の調査漁具・観測機器を備えた調査船で（せいかい16号に関連記事を掲載）、現在は船長以下22名の乗組員で運航を行っています。陽光丸調査で得られたデータやサンプルは、東シナ海におけるマアジ産卵場の特定や大型クラゲの出現把握など、資源海洋部の成果として本誌に記載されている様々な研究に大きく貢献してきました。さらに、地道な調査で得られたたくさんのサンプルは魚類標本コレクションとして収集・整理されており（せいかい13号）、そのなかからは新種も発見されています（せいかい26号）。

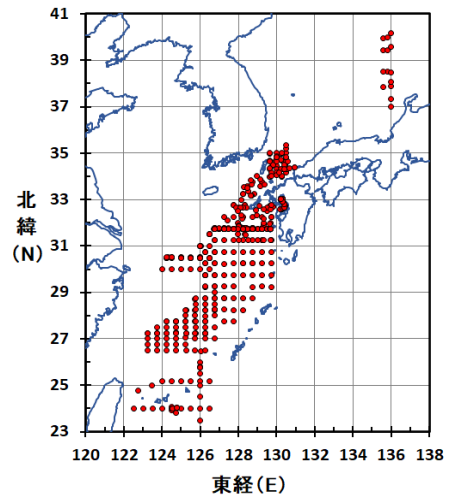


図1. 2019年度陽光丸調査航海の調査点配置（様々な研究の基礎データとなる水温・塩分の鉛直観測を行った位置を示す。同じ観測点で繰り返し調査が行われることも多い。）

漁業資源が豊富な東シナ海は隣国にとっても重要な海域となっていて、中国、韓国、台湾等、外国漁船が多数操業している海域の調査では、安全な距離を保ちつつ精度の良い観測ができるよう他船の動向を見ながら操船を行う必要があります。また、中国公船や台湾当局船舶が接近してくるときは調査を中断し、それら船舶の動向に応じた対処ならびに必要な情報の収集を行うなど、運航には緊張する場面もあります。

竣工して10年が経つ現在の陽光丸は、船内設備が充実しており居住性は良好ですが、時間の経過と共に見直さなければならぬ箇所も出始めています。最近では、船内LANサーバーの換装を行ったほか、航海機器、観測機器類からの収集データを使用した航海情報表示システム、航跡プロットシステム、調査データ検索システム等を一新することができました。しかし、いくら高性能の機器を導入しても、それを扱うのは人間であり、調査船調査では乗組員と調査員が一体となってチームワークを発揮して初めて、価値あるデータを得ることが可能となります。その面からも、今後新しい組織の下でも、陽光丸は十分に能力を発揮することができると思っています。

発行：国立研究開発法人水産研究・教育機構
 編集：国立研究開発法人水産研究・教育機構
 西海区水産研究所
 〒851-2213 長崎県長崎市多良良町1551-8
 TEL 095-860-1600 FAX 095-850-7767
 ホームページアドレス <http://snf.fra.affrc.go.jp>
 本誌掲載の文章・画像等の無断転載を禁じます。